

東日本大震災とその後の子どもたちを

支えている人たちインタビュー

第 13 回 前編

◎支えている人 / 話し手：坂本 一 さん

一般社団法人まなびの森 代表理事。10 歳まで川崎市で育ち、宮城県の郡部に移住。東北大学経済学部を卒業後、一般企業に就職したが、3 年目の夏に退職。その後、帰郷し学習塾を開いた。組織を持たず所属もしない夏休みのような人生を過ごして来たが、震災を契機に学習支援活動を開始し組織のボスとなった。同時期に震災以前から関わりのあった福祉系 NPO の代表も務めている。



地域の中、そして学校の中へ

2011 年は、自分たちの学習塾を作ることを予定していた時期でした。1 月から準備を始め、4 月に立ち上げようとしていたところで震災が起きてしまい、さあどうしよう、と。このあたりは 4 月の第 3 週くらいまでは学校が再開しなかったもので、まずは私が元々所属していた学習塾の教室を使って、こどものための居場所を開いていました。その後、4 月中旬からインフラが戻ってきたので、学習塾の事業を再開して、それと同時に沿岸部のニーズ調査に向かいました。知り合いのついで避難所の代表の方をつないでいただいて、避難所を回って、こどもたちの支援のニーズはないですか、もしあればお声がけください、ということをやっていました。6 月には仮設住宅への入居が始まったので、仮設住宅に併設された集会所で、夜間の学習支援、こどもたちが集まれる場所を作る、ということを始めました。山元町内には最終的に 9 か所仮設住宅の団地ができたのですが、そのうちの大規模な 2 か所で行いました。1 か所目は 2011 年 6 月、2 か所目は翌年、2012 年に動き始めました。

同時進行で、地域全体のこどもたちへの支援も始めました。というのも、仮設住宅で学習支援活動を始めるとき、その学区の小学校、中学校にごあいさつに伺った際に、おそらく好意的に受け止めてもらえるだろうと考えながら、告知などをご協力いただこうと思って行ったんですけど、中学校の校長先生に怒られてしまいました。仮設住宅に入っている家庭というのは、家屋を物理的に壊された家庭だけ。じゃあ、被災しているこどもってというのは、家をなくしたこどもだけかっていうと、そんなことじゃないぞ、家屋は残っているけども、何も失わなかったこどもは誰もいないんだということをおっしゃっていました。家族、

親戚、友達、何かしら喪失の経験を負ったこどもたちがすべてだから、仮設に入っているこどもたちだけを対象とする支援というのは、こちらとしては応援しない。だけど、その地域のこどもたちみんなに届くような支援であれば大歓迎だから、応援するから、どんどんそういったものを考えてくださいってというような声がけを、半ば叱られながら、宿題をもらってきてしまいました。そこで、地域の公民館でこどもたちが集まれるような居場所を作るために動き出したところ、その公民館の館長さんが快く協力してくださいまして、地域とちゃんと手をつなぐことができたかな、と思います。そんな経緯で、仮設住宅の集会所での活動と地域の公民館での活動をそれぞれ週に一回、行っていました。

活動を進めるうちに、学校の中でも活動を行うようになりました。最初は長期休暇中の学習会から始まり、その後は放課後、毎日来てほしいということで、山元町にある2つの中学校で、放課後に学校内での学習支援を、主に3年生向けに行っていました。そうして山元町との関わりが深まっていく中で、実は日中の授業の中で支援が必要な子が多いから、日中も入れないか、という話をいただきました。今は、日中の算数、数学を中心とした授業の中で、後方からこどもたちの間を回って、様々な声かけをしながら支援しています。日中の授業中に関わって、放課後に関わって、その日の夜にまた居場所に関わって、今日3回くらい会っているね、ということもあります。そんなことが今まで続いている状態ですね。

資金に関しては、当初は日本財団の復興支援系の財源にすぐ動くものがあったので、その支援をいただいていた。その後いろいろなつながりから文部科学省の方とお話するきっかけをいただき、2011年の年末から、文部科学省が当時行っていた緊急スクールカウンセラー派遣事業というもので支援していただけることになりました。結局その時の財源が今も続いています。文部科学省と直接やりとりしていた形から山元町を通した形になり、さらに現在は宮城県も間に入り、文部科学省、宮城県、山元町、まなびの森、という形になっています。山元町としても、すべて国費でまかなえるということなので、快く協力していただけていると思います。しかし、この予算はおそらく今年度いっぱいなので、来年度以降どうするかとことについては、町と協議している状況です。そんな経緯で文部科学省の復興財源と早い時期にコンタクトできたおかげで、財源に関してはあちこち走り回りながらということがあまりなくやれました。

具体的な活動内容

震災後一年目に私たちが一番心配したのは、2012年に受験を迎える子たちが、震災のために不利にならないようにということでした。中学3年生の子たちがちゃんと勉強できる場を作って、震災がなかったのと同じような状況で受験できるようにということを最初に考えたんです。だから、自分たちがそれまで学習塾やっていたこととほぼ同じようなことを夜間の居場所でもやろうと思っていました。でもやっていくうちに、そうじゃないんだなということがわかりました。当初は、おしゃべりばかりしてさっぱり勉強しなかったんです。勉強するための場のはずがまったく落ち着きませんでした。そこで、一生懸命勉強したい人

とおしゃべりしたい人と部屋を分けて、おしゃべりしたい部屋にもスタッフが入って一生懸命話聞いたら、少しすっきりしたような顔して帰るようになったんです。こどもたちは話したいんだってというようなことがわかったので、じゃあそういうこどもたちの場所だって必要だよ、と。塾であれば、勉強したくないんだから必要ないよねって、月謝払うのであれば親に負担かけるから来ないほうがいいんじゃない、となるんですけど。でも、支援活動っていう居場所はそうではない。来たくて来てるんだからその来たい目的に沿って、話したいんだったら話を聞くし、なにも話したくないんだったら、ほうっておいたらいいよね、と。不思議ですよ、何も話したくなくても来るんですよ。おもしろくないのかな、と思うんですけど、またちゃんと来るんですよ。たぶん、その子にとっては必要な場所だったんでしょうね。そういう形での場所づくりを始めてから、大人数で定着している状況で、一番大きなところでは70名くらい登録しています。中学校は1学年だいたい100名くらいの規模なので、学校全体では300名くらい。その300名のうち70名が参加しているという状況なので、常時来ているわけじゃないんですけど、相当な登録人数かなと思っています。

教室づくりについて

元々学習塾も、勉強したくない時も来て座ってていい、自分が入っているクラスやコマが入っていない時に来て、そこに座っていてもいいんだよという運営の仕方をしていました。勉強に関する参考書以外に漫画も置いていて、貸出もしていました。もちろん結果も追いますが、それだけだとこどもの気持ちを持たないじゃないですか。短期間、馬車馬のように走らせて駆け抜けさせるってことはやればやれるんですけど、もうすこし長いスパンでのこどもたちとの関わりを考えています。例えば、中2の時に会って高校生までは塾生、その後バイトで関わってもらって、そのまま就職し現在は職員という人もいます。中学で出会えば短くても5年、その後アルバイトになると10年の付き合いになるんですね。関わっている期間でのこどもの成長というか、どんな風が変わっていくのかなっていう、そこを見るのが実は楽しみなところもあります。どこに進むかわからなかった子たちが、自分で何かしら見つけたものを、自分で何とか手に入れながら、あるいは旅立っていくような、そういったところを見るのがおもしろいというようなところで、ずっとやってきたところがあります。

職員は、常勤が6名くらい、学生のアルバイトが15名ほどいます。学生アルバイトというのは、中高生の時には利用していたこどもたちが大学生になって、この活動に参加しているので、活動の厚みということについては大きなことだと思います。自分たちにとって、何がよかったのかとか、どういうふうに接してほしかったのか、どういう場所でどんな時間が過ごしたかったのかということがちゃんと、身に染みているので心強いですね。山元町での活動に参加しているのはそういう子たちで、山元町在住、仙台の大学などに通っている学生です。また、かなりの割合で、教職員、医療、看護、福祉、といった分野に進んでいく子が多いです。特に教員採用試験に関しては、ここ10年間、毎年1、2名は出ています。自分たちからはそういう働きかけとか聞き取りとかをしていないので、なんともわからないと

ころはあるんですけど、もしかしたら、居場所でのことがその道に進ませたという面もあるのかなという気はします。だから、そういう場所の価値をちゃんと理解している子たちがその地域の教職員の人たちの中にしっかり根付いていってくると、将来的にもすごく心強いことだろうなと思っています。私たちの団体のミッションは、この地域にひとのもりをつくる、ということです。まなびの森っていう名前をつける時に、そういうことを目指そうと名前をつけたので、自分としてはもう、ここらへんで目標としているものはちゃんと作れたかなと思っています。あとはもう若い連中がんばってね、という想いもあります。

不登校の居場所作りについて

夜間の居場所、放課後の学校での居場所と並行して、もうひとつ大きなテーマになってきたのが不登校のこどもたちの支援です。山元町で大きな問題になってきたのは、2016、17年、震災から5年後くらいですね。隣の町では、2013、14年くらいから大きな問題になっていて、町によって不登校のこどもたちが急増するという時期がちょっとずれていました。その間に近隣の町ではこどもの自死という問題もありましたし、やはり震災から5、6年の間というのは大きな動きというのが多かったです。現在山元町では不登校のこどもたちの居場所作りも、町と協働でやっているような状況です。

具体的な活動として、ひとつは、学校外に居場所を作ることですね。学校に足を踏み込めないこどもたちがいるので、そのこどもたちが日中過ごせる場所を作っています。もうひとつは、学校の中に戻っていくための中間的な居場所を学校内に作っています。いわゆる、保健室登校や別室登校となるとところに私たち支援機関が入って、その居場所を作る、という形です。また、こうして出会ったこどもたちの居場所として、夜間の居場所も機能しています。日中過ごせる場所が学校外や学校の中の別室にあり、夜間にも行ける場所として学校外に夜間の学習支援の場所がある。このように、少しずつ外出できるチャンスを作っています。そして、こどもを中心としたステークホルダー、主に保護者と学校の先生で、こどもが何を問題にして、抱えているのかということのアセスメントしながら、どういうところに課題があるのか、どうすると状況が変化するかということと一緒に考え、見守りをしています。その際に、短期的な学校、教室への復帰を第一目標とせず、最終的にそのこどもが、ちゃんと社会参加できるようなところまで元気になれる、そういう方向で物事を考えていきたいと思います、ということをやっています。

それから、不登校だった子たちのその後の経過について、ある程度はフォローしています。行政がやる機関は、どうしても義務教育を終えると手を離れちゃうような状況なので、高校生になったところからの関わりを、つながれる子はちゃんと残しておこうね、とやっているところです。きちんとつながりを持ちながら、自分たちがテーマにしている社会参加、ちゃんと社会に出ていけるようなところにこどもたちをつないでいけるように、しっかりやっていきたいなと思っています。具体的にそういう子たちも関わっていく中で、ちゃんと大人になれるんだなっていうのは、実感としてあります。

後編へつづく